

### 5 Seasonal Variations of the Eskimo:A Study in Social Morphology Marcel Mauss

—— エスキモーの季節的变化：社会形態の研究 ——

#### ○Introduction

**p.157**

para1 本論：エスキモーの社会形態についての研究

- \_ 社会の基礎的データについて記述するだけでなく、説明することを意図
- …住居のパターン、集団規模や密度、集団の分配の仕方を含む

para2 ○対象：特定の地理的集団 ← 純粋な民族学的研究の形をとることは避ける

…エスキモーの形態をすべて収集することはしない

エスキモーの全体的関係について提示することを行う

○エスキモーを対象とする理由：

- ・エスキモーの間では筆者たちが注目したい関係が強調され、拡大しているため
- ・彼らの性質や意味について明確に理解できるため
  - ⇒ 意味が明白でない社会 or 社会構成が観察者からみえにくい社会でも理解しやすい
- ・年間を通して形態が同じでないため、特徴的な研究フィールドを提供してくれる
  - ← 集団の集中・分散や住居の形態、集落の性格が、季節によって完全に变化
  - …人間集団の形態が、異なる共同体活動の形にどのように影響するのかの研究には好都合

para3 エスキモーの集団だけが、広く適用できる説を構築するための研究に適切な基礎を提供してくれる

- \_ 海岸沿いの広い地域に、多くのエスキモー社会が分布
- …有効に比較できる程度に均質で、かつ比較が有益になる程度に異なっている

○科学的な主張の妥当性は、それを裏付ける事例の数に依拠している訳ではない

= 注意深く体系的になされた一つの事例研究の結果は、異なる社会・種・文化から選ばれた多くの共通点のない事例や珍しい事例に頼って証明された結果と同じくらい妥当性がある

Ex.)John Stuart Mill の素晴らしく構成された実験は法則を十分に証明した

⇒ 本論でエスキモーの事例から構成する関係は、一般的に適用され得る

**p.158**

para1 以上のような疑問に解答するためには…

- ・人文地理学という特別な学問分野で実行される方法を考慮に入れる必要
- \_ 扱う事実…ある意味で、我々が関心を持つものと同種のもの
- ・地球上の人間の分布と社会の資料形態の研究を提案 ← 重要な結果をもたらす

**問題点**

○社会集団の領土≠他から独立したもの ← 地形や、鉱物資源、植物相や動物相が社会構成に影響

しかし、人文地理学の専門家…自然とものごとを一つの視点からみる方に傾いてしまう

→ 彼らの研究は、大半の地理的要因に対して排他的な立場であった

…社会におけるすべての要素を調査する代わりに、最も重要な土地の要因に着目

← 特に社会との関係の中で土地について考える…彼らと普通の地理学者の違い

para2 しかし、人文地理学者は、他の要素との相互作用を無視して、土地はそれ自体で効果を持つと考える  
 ⇔ 土地は、不可分の他の多くの要素との結合なしには効果を持つことはできない  
 Ex.)人間の住居をおくには不十分な鉱物資源の存在 → 産業技術のある段階で開発する必要  
 Ex.)人間の集住・・・気候や土地の形状についての単なる主張では不十分  
 ← 道徳上・法律上・宗教上の秩序も集住という生活形態に影響している  
 → 地理的状况は注意を払うべき重要な要因だが、人間集団の物質形態の一つの状態である  
 多くの場合、多くの社会の状態との関係によってのみ、結果につながる  
 ⇨ 土地の要素は、複雑で全体的な社会的コンテキストとの関係の中で検討されるべき

p.159

para1 土地要素の結果について研究するとき、集団生活の全てのカテゴリにおける影響を考える必要がある  
 ...土地要素の結果についての疑問は地理的なものだけではなく、社会学特有の疑問もある  
 ← 本研究：それらの疑問に社会学的立場からアプローチ

### ○Seasonal Morphology 社会形態

para2 集落・・・エスキモー社会の基礎単位

← 季節によって異なる形態をとる 夏：テントに住み、分散する 冬：互いに集中した住居に住む

**本論**：二つの住居タイプとグルーピング方法の対応について記述 ⇒ その原因と結果についての理解

#### Summer habitat The tent

para3 まず、テントについて考える ← 冬の住居よりもシンプルであるため

para4 Angmagssalik からコディアク島にかけて、テントは *lupik* という名前で呼ばれ、同じ形をしている

**構造** ・円錐状に組み立てられた棒に皮(多くの場合トナカイ)をかけたもの

・テントの頂部は開いていない ← 明かりは煙を出さないで、排出する必要がない

※インディアンのテント・・・頂部が開いている

・入口は堅く閉ざされている → 中は暗闇

para5 **居住者の構成**：最も狭い意味の家族で構成・・・男性とその妻(部屋があれば妻たち)+未婚の子供と養子

※例外：高齢の親族、未亡人とその子供、客

← 家族とテントの関係・・・とても密接で、一方の構成がもう一方の構成を規定する

・それぞれの家庭にランプは一つ → 各テントにランプは一つ

・テントの中に寝るための皮をかけたベンチは一つ → 仕切りはなく、家族と客を区別しない

⇒ テントはその年の夏の居住者に合わせた大きさに造られる

#### Winter habitat The house

para6 冬にはエスキモーの社会形態は全く変化する ...暮らしの形や同居する集団、住居の形

p.160

para1 冬には、エスキモーは長い家(long-houses)を造る ※形態についての記述→その内容について議論

para2 long-house・・・三つの不可欠な要素によって構成される

①通路：外から始まり、部分的に地下を通過して内部に続く

②ランプを置くための長いす

③仕切り：長いすをいくつかの区画に分ける

← エスキモーの家に特徴的

異なる地域では、住居は特定の特徴を持ち、副次的な多様性を生じさせる

・ *The contents of the house* 家の内容

para3 家の居住集団の性質について

para4 冬の家…複数の家族で構成 ⇔ テント…一つの家族で構成される

↑ 一緒に住む家族の数は多少可変的 Ex.)グリーンランド東部の部族…6,7~9 家族

グリーンランド西部の部族…10 家族

Smith Strait の小さな雪や石の家では数が減る

同じ家に複数の家族が住むことはエスキモーの冬の家の特徴的

→ 一緒に住む家族の減少=文化自体が弱くなっていることを示す

アラスカ政府の一斉調査…エスキモーの村はインディアン村とは、一軒の家あたりの家族の数で区別

para5 { グリーンランドの家…それぞれの家族は家の中で、ベンチで区画された自分たちの場所を持つ  
イグルーの家…それぞれの家族は自分たちの特別な長いすを持つ

⇒ 家の構成と集団の構成には密接な関係

…それぞれの家族が占める空間は、その家族の人数によって決定されるものではない

← 家族=同等の立場を持つ分割された単位

— 一人の家族は二人以上で構成される家族と同じ大きさの空間を占める

・ *The kashim*

para6 他の注目に値する冬の構造 ← エスキモーの冬の生活の特徴を強調

— *kashim* ‘集合の中の自分の場所’

para7 ← もはやどの地域でも見られない

過去の事例

- ・ アラスカとアメリカ西海岸の部族で Atkinson の時代まで見られた
  - ・ 記述がある最も新しい調査…バフィン島とハドソン海峡の南海岸、ハドソン湾北西海岸
  - ・ ラブラドル沿岸地方に渡った初期の頃のモラビアの宣教師により存在が記述される
  - ※デンマークの著者によって、集落の遺跡に *kashim* の痕跡はないという記述(例外的)
  - ・ エスキモーの物語…*kashim* のことが書かれている
- 初期のエスキモーの住居において *kashim* が普通の構成要素であったと言える

para8 *kashim*…拡大した冬の住居

— 二つの建造物の関係はあまりに近く、異なる地域の *kashim* の多様性は冬の住居の多様性に類似

○*kashim* と冬の住居の二つの重要な差異

①*kashim* は中央に炉床を持つ(冬の住居は持たない) ← アラスカの極端な南部は除く

…薪の使用がある地域だけでなく、Baffin 島のような雪で作られた同時代の *kashim* でもみられる

②*kashim* は区画や長いすを持たず、座席だけがある

…雪で *kashim* を作る場合、一つの大きなドームを構築することは不可能

→ ドームは接続し、壁によって *kashim* は大きなホールの形を呈する

p.161

para1 内部構造の配置の差異——機能の差異と一致

*kashim* の構造(境界や仕切りはなく中央に炉床がある) ← 共同社会全体の共同の家であるため

Ex.) 共同体の再結合の儀式が行われる場

・ 成人男性(既婚 or 未婚)が妻や子供と離れて寝る場(アラスカ)

・ サウナ小屋としての使用(南アラスカの部族) ← 現代のインディアンやロシアに起源

para2 kashim は冬の間のみ造られる

→ 冬は集団の極度の集中によって特徴付けられる

…いくつかの家族が同じ家で共同生活を行うときだけでなく、同じ集落の全ての家族 or 集落内の男性が、同じ場所で共同生活を行うことで再結合の必要性を感じたとき起こる

### ○The Causes of Eskimo Seasonal Variations

para3 以上の二重構造の多様な特徴が生じる全ての理由を明らかにすることは難しい

⇔ 少なくとも現象の背後にある要因の一部を示すことは可能

para4 多くの観察者は単純な説明で満足する傾向にある

- |                            |
|----------------------------|
| • 共同の家や半地下の家は熱をよりよく保つ      |
| • 同じ屋根の下に多くの人がいる方が、熱が高く保てる |
| • 複数の家族が一緒にいることで燃料を節約できる   |

← 寒さへの対抗以上の意味を見出してない. 説明の一部でしかない

⇔ ①エスキモーの中には比較的温帯性の地域に住んでいる集団も存在

Ex.)グリーンランド南部やラブラドル地方

← 陸の氷や冷たい風によって運ばれる氷河の接近が冬の寒さを感じさせる

②エスキモーよりも厳しい環境(大陸性気候、高緯度)に住む民族の存在

Ex.)ラブラドル地方内陸のインディアン・モンタニエ族・

バレングラウンズのクリー族・アラスカの森林のインディアン

…年間を通じてエスキモーのものに似たテントに住む

⇔ テントの頂部は煙を逃がすために開いている ← 夏でも寒さに対して非効率的

← エスキモーのような寒さに対して有効な家というアイデアを採用しない

→ エスキモーの冬の家が、社会的慣習を借用してきたものであるとする説明を否定する証拠

③住居の形態を変化させる理由がある場所でも、そのような変化は起こらない

← 冬の家はエスキモー社会特有のものであるという証拠

・アラスカの森林地方…冬の住居を木々に近いところに作る ⇔ ランプのための油を獲得

**p.162**

para1 この問題とその複雑性の説明…Steensbyによって提案される

- 原始的なエスキモーの文化=昔のインディアンの文化 ← 最も近い点は夏のエスキモーにみられる

・エスキモーの家は平原のインディアン(マンダン族~イロクオイ族)のタイプと一致


← 冬の技術全般と共に原始の頃に借用し、発展してきたものである可能性

⇔ 狩りを主要な生業とし、テントにのみ住むエスキモー集団の痕跡はみられない

→ エスキモーは社会集団として現れた頃から、既に二重の文化を構築していた

○インディアンの long-house とエスキモーの家の比較は厳密ではない

…両者の特徴の差異 Ex.)通路・ベンチ・ランプ置き場の有無

para2  エスキモーが冬に集住して夏には散在することに対する説明の必要

para3 エスキモーはその時々での生活の方法と強く結びつき、別の種類の生活を考え出すことはほとんどない

- 接触する近隣の人々の例や、生活がよりよくなるという見込みは、彼らに自分たちのやり方を変えるという願望を引き起こすことはない

Ex.)北部アメリカのエスキモーはアサバスカ川やアルゴンキンに住む隣人と頻繁に交渉する

If 防水のブーツ保持する代わりにそれらのインディアンのかんじきを採用

→ エスキモーの小集団は冬の半ばにも動物を追うことが可能

⇒ エスキモーは、変化を夢見ることなく伝統的な構造を保つ

para4 以上のような社会現象 → エスキモーの社会生活=彼らが捕まえる動物のように生活する、動物との共生

…それらの動物は季節によって集まったり分散したりする

Ex.)冬にはセイウチやアザラシの大きな集団は沿岸部のある場所に集合

・アザラシ…子供を守るための氷の地と顔を出して呼吸するための穴がある場所が必要

← 浅瀬や浜辺、小島、岬の近くでこのような場所は制限される

→ アザラシを捕ることができるのはこのような場所 ← エスキモーの知恵

⇒ 水からの出口があれば、アザラシは海の中のフィヨルドの深い所で分散して遊ぶ

→ ハンターはアザラシが集まる特別な場所に同じように分散する

⇒ きれいな水の中でサケや他の小さな魚を釣ったり、牧草地やデルタツンドラでシカやトナ

カイを狩ったりする機会…遊牧生活と狩りの追跡における散在を導く

para5 夏：狩猟や漁労のための制限のないエリアを開放 ⇔ 冬：活動エリアを狭い範囲に制限

← エスキモー社会の形態的な構成の集中と分散のリズムを生み出す

⇒ エスキモー社会を活気あるものにする動きはそれを取り巻く生活と同時性をもつ

para6 生態学的・技術的要因も重要な影響を持つ ← 全体的な現象を説明するためには不十分

…どのようにしてエスキモーが冬に集住して、夏に分散するかを理解できる

…これらの集住が既述のような関係をどのようにして生み出すのかについては説明できない

Ex.)kashim の理由やそれらの間の近い関係については説明しない

エスキモーの住居…一箇所に集住することや強く集合的な生活を作ることなしに結合

Ex.)ネイティブの人々…テントを隣同士に建てる

同じ屋根の下にすむ代わりに各々小さな家を建てる

→ kashim や男性の家、同じ家族のいくつかの分家がエスキモー社会を制限するわけではない

← 他の集団でもみられる → 北部の社会の構造の特徴の結果ではない

⇒ 他の文化の特徴の一般性は本研究の枠組みになる

⇒ エスキモー技術の状態は集中と拡散が起こる時間や持続、連続を説明…他との対立を示す

p.163

## ○The Effects of Eskimo Seasonal Variations

para1 エスキモーの形態の多様性が集団の信仰上の生活に与える影響について ← 本研究の重要な部分

### ・ Effects on religious life

para2 エスキモーの信仰…社会組織と同じ変化のリズムを持つ

← 夏の信仰と冬の信仰の存在. もっと言えば夏の間は信仰が存在しない

☐: 行われる儀式は個人的で家庭的 ← 誕生や死の儀式と、ある禁止令の観察

…純粋に個人的な魔力は、儀式が最小である医療科学の単純な種類を除いては存在しにくい

para3 **冬**: 集落は連続的な宗教的高まりの状態 ← 神話や伝説が世代から世代へと伝承される時期  
最も軽い行事でも **angedkok** という魔術師の厳粛な干渉を必要とする  
比較的重要なタブーも、公の儀式や連続したコミュニティの訪問の際に高められる  
・公のシャーマニズムの印象的なパフォーマンス…集団を襲う空腹をそらすためのもの  
(← 特に、猟があてにならず、供給が危機的に低くなるなくなる3月～5月の間)  
…冬の生活は長期に渡る儀式であると描写できる

⇒ もし、間違った観察と論評を述べたとしたら、それはこの継続する宗教的な生活の根拠から離れたもの  
・集団の宗教的な心的傾向…いくつかのエスキモー社会では極端な形をとる  
→ 不幸の集積(嵐が長引く、獲物に逃げられる、不運に氷が壊れるなど)は儀式的な禁止への違反に帰する  
← 違反は公的に打ち明けられる必要があり、それによって被害が軽くなる  
公の懺悔は冬の社会生活全体を特徴付ける一種の神聖さを示す

p.164



para1 宗教的な冬の生活と夏の生活との対照…著しく集合すること

← 祭祀が公に行われると単純にいうことはできない

⇒ コミュニティーが持つ感情はその行動で満たされる …祭祀は目的であり集団の表現である

para2 ← **kashim** がどこでも見られ、祭祀が **kashim** の中で位置づけられるという現象から引き出される

↳ 本質的に集団の統一を明らかにする **public place** である

← 統一はとても強く、**kashim** においては家族や特定の家の個人はなくなる

⇒ **kashim** の中では、個人はそれぞれが振る舞う社会的機能によって単に区別される

para3 夏の生活と冬の生活との対照…儀式や祭祀、多くの種類の宗教的式典における形式を示さない

思考や集団の表現、集団全体の心的傾向に大いに影響する

para4 季節による差異をみせる事例

○バフィン島の **Oqumiut** とフロツビシャー湾の **Nugumiut**

・祭祀の場において二つの集団に分けられる

↳ 冬に生まれた者の集団…ライチョウという意味の **axigim** と呼ばれる。陸を象徴する  
・夏に生まれた者の集団…アヒルという意味の **aggim** と呼ばれる。海を象徴する

→ 綱を引き、勝った方に従属する ※このような区別は特別な儀式のときに限定されるものではない

・二つの集団…すべての中央エスキモーのその他の習慣の基礎をもちます

Ex.)お守り(主に鳥の皮で作られる) ← 生まれ月によって管理…陸の鳥は冬の鳥、海の鳥は夏の鳥

○**Angmagssalik**(上記の事例が見られるところからは離れている)

・誕生の儀式…冬に生まれた子供か夏に生まれた子供かによってかなり異なる

夏生まれの子供：最初の食事は陸の動物か、真水で料理された川魚のスープ

冬生まれの子供：最初の食事は塩水で料理された海の動物

para5 人々を二つのカテゴリーに分けることは、全てを含むよりよく、より一般的な分割につながる

・全ての動物と重要な自然事象が、夏のものと冬のものに分けられている神話の議論なしでは、

↙ 人間を二つに分けることは、多くの儀式的禁止の基礎と同じ思想であると認識するだろう

冬のもの夏のもの存在

→ エスキモーは両者の対照を深く感じるため、あらゆる場面で両者を混ぜることを禁じている

Ex.)・トナカイ(夏の動物)の皮はセイウチ(冬の動物)の皮に触れることはない

- ・夏が始まると、エスキモーは冬の服をしまって新しい服を身につけるか、セイウチを獲る季節に使わない服を着るまで、カリブー(夏の動物)を食べない
- ・夏の間ハンターのシェルターとなる小さなテントは狩りの服と共に岩の下に埋められる
- ・セイウチの皮のカバーや革紐はトナカイを狩る場所には持ち込まれない
- ・カリブーの皮で作られた冬の服は、男性がセイウチ狩に発つ前にしまわなければならない
- ・氷の上に住む間は、カリブーやトナカイの皮を労働に使わない
- ・鮭の身(夏の釣りによる製品)は海の動物の肉とは接触しない(例えお腹の中でも)

⇒ アザラシの肉との接触はあまり厳しく制限されない ← 一年中獲れるため

→ 以上のタブーを破ることは、違反者に狩りにおいて可視的で、接触した人に伝わる汚れを与える

○実際、以上のようなタブーの存在はメッセンジャーという特別な階級の形態を必要としてきた

└ その年の最初のセイウチの捕獲を知らせる役割

← 冬が始まったという印. カリブーの皮を使った仕事はすぐに終わり、生活の仕方が完全に変わる

p.165

para1

- ・人と物を分類する方法は、二つの季節の間の基本的な対照的印象を支える
- ・それぞれの季節は人と物の全体の階級の定義を支える

⇒ 夏と冬との概念

…エスキモーの思想のシステムは周囲で回転する二つのボールのようなものであると言える

## ○Conclusion

para2

エスキモーの社会生活…並行する二重の形態をとった二つの明確な対立構造

※両者の間には過渡期が存在…住居が直ちに变化したり、夏の住居が常に一家族で構成される訳ではない

事実

- ・エスキモーは二つにグルーピングされる
  - ・集団の二つの形態に、法システム・倫理上の規則・家庭経済・宗教生活の中の二つの種類の一致が関連
- …冬の極度の集住において、純粋な思想のコミュニティと資料的おもしろさは形成される

→ 冬の心的傾向と宗教的統一 ← 夏の分散で生じる、孤立や社会的分裂、モラルや宗教的生活

↑  
対比

para3

連続する相互の文化的パターンを区別する質的な差異

…一年の二つの時期における社会生活との関連の度合いの量的な差異に直接関係する

【冬】: エスキモー社会が強く集まり、連続した興奮と多動性の連続の中にある時期

→ 個々人は互いに密に接触 → 社会的相互作用はより頻繁に、連続的に、密着したものになる

存在と一定の活動によって、集団はより自身について知り、個人の意識の中で突出した場所を想定する



para4

【夏】: 社会的結束は緩む、関係は弱くなり、それを形成する人間も減る → 心理的に生活の速度が緩くなる

⇒ 二つの時期の差異は、社会的活動が重要な時期と社会生活に活気がない時期との間に生じ得るものと対

応

← 冬の家は技術的条件によるものという説明はできない

- エスキモーの文化の重要な要素の一つであり、文化が最大の発展を達成したとき現れる  
…全体の中の独立した一部であり、文化が変化し始めたとき姿を消す

para5 エスキモーの社会生活…一種の一定のリズムにまとめられる

- 一年を通じての一定のリズムではない

→ この珍しい交替はエスキモーの間で最もよくみられるが、エスキモーだけに限定されるものではない

para6 ○アメリカンインディアンの事例

- 同じような方法で暮らす重要な社会集団が存在

北西海岸の部族(Tlingit, Haida, Kwakiutl, Aht, Nootka)が中心  
カリフォルニアの部族(Hupa, Wintu)でもみられる

…冬に極端に集住し、夏には極端に分散する

← 生物学的、技術的に絶対的な理由が存在するわけではない

→ 多くの場合、二重の形態の背景には二つの社会生活のシステムが存在

Ex.)Kwakiutl の事例：冬には氏族は姿を消し、全く異なるグループを形成

…貴族と平民による階層構造を持つ宗教団体

← 宗教的な生活は冬に集中し、世俗的な生活は夏のエスキモーに類

似

p.166

para1 季節の影響が明確な温帯性や大陸性気候の地域では、同じような現象が無数にみられる

- ヨーロッパの山岳牧畜民：夏に移住。全ての村で集団が完全にいなくなる
- インドの仏教修道士：逆の現象がみられる → 雨季…托鉢修道士は放浪の旅をやめて修道院に戻る

para2 ○西洋社会でみられる同じリズムの現象：

- ・都会生活…7月の終わり頃になると夏の間の分散が生じる

暇で無気力な時期、余暇に入る(秋の終わりまで続く)

→ 秋の終わりから再び6月がくるまで生活がだんだんと活発になる



- ・農村生活…冬には一種の冬眠状態に入る

→ 集団は季節的な移住の地点に分散、地域集団や家族集団は隠遁生活に入る

夏には皆が活気付く。労働者は現場に戻り、人々は互いに交流をもつようになる

← 祭りの時期

→ 統計値にも同様の社会生活の多様性が現れる

- ・都市の現象である自殺…秋の終わりから6月までの間増加



- ・農村の現象である殺人…春の始めから夏の終わりにかけて増加

para3 ⇒ 我々人間は重要な一般性を持つ法則に影響を与えている

社会生活…増加と減少、活動と休息、努力と復活の時期が存在

→ 社会生活は個人の心身に疲労を蓄積させる → ペースを落として目をそらす時期が存在

⇒ 季節的な要因は、これらの二つの段階が生じるもっとも適切な場合を示しているに過ぎない

- ・冬における長い祭りや集住生活の後、エスキモーは個人的な生活を必要とする



- ⇒ エスキモーは自然な必要性への対応として現れるこの変化を楽しんでいる
  - 技術的な要因は年間を通して続くこれらの動きの要求に対応している
  - ⇔ もしこれらの要因が存在せずとも、変化は多少異なった方法で継続すると考えられる
- Ex.) 好都合な状況がベーリング海峡とバロウ岬のエスキモーにもたらされる
  - *kashim* が一時的に再発。そこで熱狂的な踊りや大宴会や公的な交換が行われる

p.167

para1 エスキモーの生活の転換期・・・二つの段階の間の対照と明確な対立によってのみ示される

- ← エスキモーでは現象が特に観察しやすいが、実はどこでもみられる現象
- =季節によるリズムが最も明確であるが、それは唯一無二の現象ではない
- 季節ごと、月ごと、週ごと、日ごとに起こる小さなリズムが存在。各社会機能は独自のリズムを持つ

・・・これが正しいとすれば、有益な調査の重要な可能性のため、主張する価値があると筆者は考える

para2 有効性がどのようなものであっても、そこには同じ考慮に値する別の結論が存在する

para3 ○方法論的な提案：倫理上、宗教的、法的に形成された社会生活は、本質的な基礎に依存している

- 社会生活は人間集団の形成と構成という基礎に伴って変化する



○重要な事例による仮説の証明の必要性

Ex.)刑法や民法のそれぞれの発展が社会形態にどのように依存しているのか？

個人や家族や宗教的・政治的集団の統合や分解の程度にどのように依存してきたのか？

未開部族の心的傾向はどのようにして社会構造を直接的に反映するのか？

・これらの法則が依存する観察と比較は、*fortiori* のような未解決点を一般原理として認めてしまう

⇔ これまでの現象は形態的多様性に加えて、他の知られていない要因に起因する可能性

しかし、エスキモー社会は、**Bacon** が決定的とみなした珍しいテストケースの事例を提供

・・・集団の変化が形成される際、宗教的・法的・倫理的な生活の同時に起こる変化を観察できる

← 研究室で行われる実験と同じ明快さと正確さを持ち、毎年繰り返される不変性を持つ



社会学的提案が比較的成立するといえる → 現在の研究は少なくとも方法論的優位性を持つ

・・・一つの明確に証明された事例が、どのようにして事実や演繹法の蓄積より優れた一般的法則を形成するのかを示す必要がある